第３回　あいうえおかきくけこさしす

「世界から見た台北日本語授業校」（執筆者：服部美貴／アドバイザー）

連載の第三回では、台北日本語授業校（以下、授業校）アドバイザーの服部が、毎年日本で開催される「母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究会[1]」等、世界各地の関係者との交流から見える同校の特徴について、運営形態・現地校の教育・台湾と日本の関係の３点からご紹介します。

一、運営形態

１．高まる継承語としての日本語教育のニーズ

台北日本語授業校のように、日本にルーツを持つ子どもたちを対象にした日本語学習機関は少なくありません。

日本語補習授業校（以下、補習校）は、本来は日系企業の海外駐在員の子どもを対象として日本人学校がない都市に設置され、その一部は日本政府の援助対象校です。バブル景気が終焉を迎えた1990年代半ばごろから海外の企業駐在員の数が減少しました。その一方で、国際結婚の割合が高くなり、また個人で海外就職や起業を選ぶ日本人が増えてきました。こうしたことを背景に、補習校には帰国を前提としない日本にルーツを持つ子どもが増えてきています。

また、既存の補習校以外にも多くの継承語学校がヨーロッパやアジアで設立されています。その多くが台北と同じように、保護者が子どもたちへの日本語継承の必要性を感じ自らの行動力で立ち上げた学校です。

２．台北日本語授業校の運営形態の特徴

そうした学校（団体）の中で、台北日本語授業校の運営形態は以下の特徴があります。

①　保護者は必ず何らかの委員を担当しなければならない。
②　保護者が組織の要となっている。
③　保護者が教壇に立つ。
④　以上の参与は全て無償である。
⑤　台北日本人学校の先生方に年に複数回授業をしていただいている。

他国の継承語学校の場合は、在籍生の保護者が教師を兼ねていても、教師としての報酬があるそうです。台北日本語授業校では、それがその人自身の専門分野や職業であっても、在校生の保護者である限り報酬は出ません。ということで、ボランティア教師の交通費以外の人件費がかかっていません。運営費（授業料）は子ども一人につき１ヵ月500元（約2,600円）と聞いて、他国の関係者からよく驚かれています。

３．運営の課題

保護者自身により設立・運営されているため、その基盤が脆弱であることは、第一回、第二回でも述べられています。

教壇に立った経験のない或いは少ない保護者にとっては、授業をするというのは大変な不安と緊張が伴います。「お母さん」が授業をしていることに対して甘えが出る子どももいます。実際に、保護者としての仕事を負担に感じて退学したり入学を躊躇したりする人もいます。授業校での保護者の仕事と家庭や本業等と両立させるのは、たやすいことではありません。

そうした不安は、日本人学校の先生方に年に数回授業をしていただいていることで軽減されています。それは子どもが授業を受けるだけではなく、保護者にとっても研修の場となっているのです。

「母語としての国語（以下、JNL）」でも「外国語

1　http://mhb.jp/

としての日本語（以下、JFL）」でもない「継承語としての日本語（以下、JHL）」のカリキュラム開発や教師養成は、近年北米を中心に始まっています。教師には様々な資質が必要とされますが、子どもたちの背景理解や子どもたちへの愛情は欠かせません。その点では、保護者も素晴らしい教師の条件のいくつかを備えています。そこから学習と経験を重ねていくのです。

子どもと一緒に、否、もしかすると子ども以上に頑張っているのが保護者です。そこは保護者自身の学習の場でもあります。

一生懸命に授業校に関わる保護者たちの後姿は子どもに「勉強しなさい」という言葉以上に力があるように思います。

二、台湾の教育

１．日本の国語の教科書の使用について

台北日本語授業校と同様の活動は、桃園、新竹、台中、台南、高雄の各都市でも行われています。そして、どの団体も日本の国語の教科書を主な教材としています。しかしながら、JHL 教育の現場で国語教科書を使用しているのは、世界から見ると少数派になりつつあります。

では、どうして台湾では国語教科書なのでしょうか。

授業校で日本の国語教科書を使用する背景には、「子どもたちに少しでも日本の教育に触れさせたい。」「体験入学させていただく日本の学校でも同じ教科書を使用している。」「他に適当な教材がない。」という積極的な理由と消極的な理由による保護者の声があります。

前の二つは連載の第一回でも述べましたが、「他に適当な教材がない。」というのは、市販されている教材は JNL か JFL 教材で、程度の差はあれ生まれた時から親の言語として日本語に接し日常生活でも使っていて学校では中国語や英語を使用している子どもたちの JHL 教育には合っているとは言えません。

２．漢字の壁

世界で国語教科書離れが進んでいるのはどうしてでしょうか。

理由はいくつかあります。まずはその内容です。土曜日の数時間だけで教科書の内容を扱おうとすると、圧倒的に時間が足りません。また、日本と異なる風土気候、習慣の中で暮らす子どもたちにはその内容は理解しにくく、表面的に読むだけになってしまいます。

更に、「漢字の壁」です。文部科学省の資料によると、日本の小学校１年生で習う漢字は 80 字、２年生では 160 字、３年生以降では 200 字或いはそれに近い数を学習し、６年間で約 1000 の漢字を学ぶことになります[2]。これが、非漢字圏の教育を受ける子どもたちには負担になるということです。

しかし、漢字圏の台湾では違います。教科書により多少の違いはありますが、小学１年生で既に 500 字余りを学習し、４年生では 2500 字余り、６年間では 4000 字近い漢字が国語の教科書に出現するとのことです[3]。それも、日本の漢字よりも複雑な繁体字です。日本の小学校に体験入学した時に難しい漢字を使って日本の先生に驚かれたというのは、「台湾あるある」の一つです。（勿論そのため、台湾の小学校では毎日のようにひたすら漢字を書く宿題が出ます。）

そのため、国語の教科書にたくさん漢字が出てくると、台湾の現地校で学ぶ子どもたちにとっては分かる語彙が増えることになります。従って、年齢が上がるにつれて日本語の情報へのアクセスがしやすくなり、それらを通して語彙が増えている様子が見られます。

2　http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/koku/001.htm
3　file:///C:/Users/USER/%E4%B8%8B%E8%BC%89/1743-6413-1-PB.pdf

３．教育形態の違い

もう一つ欠かせない観点は、現地校の教育形態の違いです。日本のことはよくわかりませんが、台湾でも近年はITを活用した授業やアクティブ・ラーニングが取り入れられるようになってきています。しかしながら、子どもたちが議論をしながら進められる授業形態の欧米の学校教育と台湾では、やはり隔たりがあるように思います。教壇上の教師がマイクを通した大音量で講義している風景は台湾の小学校や中学校で珍しくありません。「ドイツの学校では、とにかく発言することが大事。なので、JHL教育の現場でも内容の如何に関わらず子どもたちは活発に意見を言う。」とドイツの関係者から伺いました。

そうした台湾の教育を受けている子どもたち、そしてそれに近い１対多数の教育を受けてきた世代の日本の保護者にとっては、欧米を中心に開発されているカリキュラムを取り入れるとなると、授業観を根本から変えなければなりません。勿論、活動の質の向上のための挑戦は必要です。ただ、前述したように家庭と本来の仕事で十分に忙しくしている保護者教師への過度な負担は望ましいことではありません。それにより辞めてしまう人が増えれば学校の存続にも影響します。

卒業生や保護者のメッセージで最もよく見かけるのは、「続けてよかった。」「皆さんも、是非続けてください。」という言葉です。持続可能な活動にしていくことを、保護者による運営では最優先しています。

三、台湾と日本の関係

１．日本との特別な関係

サブカルチャーの人気やITの発達により日本に親しみを持ってくれる国は多くなっていると思いますが、台湾は地理的にも歴史的にも日本と特別な関係にあります。

ご存じのように、台湾は1945年までの50年間は日本の統治時代でした。その影響で、台湾には多くの日本時代の名残があり、80歳以上の方には日本の教育を受けた方もいらっしゃいます。授業校の子どもたちの中にも、台湾の祖父母と日本語で話す人もいます。

２．もっと歴史を知らなければ

日本で台湾を語る際には「親日」という言葉がよく使われますが、歴史や社会はそう簡単にひと括りできるものではありません。現地校では小学５年生で台湾の歴史を勉強します。日本統治時代について習う時には、子どもたちは多かれ少なかれ「日本」に反応される経験をします。それが肯定的か否定的かはクラスメートによっても教師によっても本人によっても違いますが、日本の教科書ではほとんど触れられていないアジアの近現代の歴史は、日本人の私たちも勉強する必要があると思います。

韓国では、子どもたちが現地の学校で反日的な教育を受ける一方で自分たち親は歴史のことをよく知らないということで、改めて歴史を学ぶ日本人の保護者グループもあると韓国の関係者から伺いました。

３．謝謝台湾！

「台湾の一番の魅力はその温かい人々だ」と言われています。私たちも台湾の方々に助けていただいた経験は数え切れません。親子で日本語を話していることを好意的に捉えてくださる方も多いです。こうした台湾で子どもに日本語を継承できることを大変ありがたく思っています。

この台湾に仲間同士で親も子も育て合う場があり、それが皆さんのおかげで18年目を迎えていること、そうした環境があるのは幸せだと思います。全員が同じ考えを持ち同じように満足するというのは難しいですが、日本の言葉や文化だけではなく、みんなが持っているものを伝え共有することができる場。台北日本語授業校は、そんな場所なのです。

ご高覧いただき、ありがとうございました。